



第75号 (年4回発行) 編集発行 弘学院大学 前報委員 印刷所 (有)小野印刷所

二〇一八(平成30)年度 学位記授与式式辞

学長 吉岡 利忠



「冬なくば春なきに」と言います。が、ようやく津軽の地にもその漂いが始まりました。本日、2018(平成30)年度の文学部45回生、社会学部17回生、看護学部11回生ならびに大学院社会学部社会学研究科修士課程15回生、大学院文学研究科修士課程13回生の学位記授与式を挙げるにあたり、弘前学院理事長・学院長であります阿保邦弘先生はじめご来賓の方々、卒業生、修生のご家族の皆様、校友会、父母と教職員の会、理事会、評議員会として教職員各位のご臨席を賜り誠にありがとうございます。

(ここに総勢130名(社会学部)

中長期目標実施計画の 確立・実践に向けて

学校法人弘前学院 理事長・学院長 阿保 邦弘



九 「大学入試改革再考」

「偏差値」(その1) 洋の東西を問わず、古来より「とば」には力があると信じられてきた。特に聖書はことばの宝庫であ

が、いつでも母校を訪問して頂き、オフィスアワーで担当した教員との談話、相談そして在学生との情報交換など、特に在学生にとっては先輩からのさまざまな情報は貴重なものです。皆さまが講義を受け、先生方の研究室で議論や討論した「号館」は取り壊しのため4月1日から閉鎖されます。素晴らしいことに大学キャンパスには新1号館がスマートな外壁で飾られ、利用しやすい教室やその他の施設で完成しました。卒業する皆さまには、昨日、卒業式予行でほんの少しの時間新1号館にお入りになったと思います。新校舎で勉強する機会も、残念ながら持てなかったのですが、ホームカミングデーとして自由にお出掛け頂きたいのです。新1号館の一階にはラーニングコモンズという名称であります。少人数の教育の場としてのアクティブラーニング、講義、講演研究会、学術集会などが可能となります。既にあります学生ホールと

ともにこの場を卒業なさる皆さまにも利用していただきたく思います。上智大学名誉教授でありますアルフオンス・デーケン先生はユーモラスにあふれかつ心に響く講話をなさいます。それらは多くの講演集に掲載されておりお読みになった方々もおられるでしょう。ドイツ生まれですが心は日本人だと言ひ、日本で初めて「死生学」を提唱し、「よく生きよよく笑ひよき死と出会う」は死の哲学とも言えるものです。また、「人生は旅であり、人間はゴールに向かって旅人ともいえる。人生の旅はただ簡単にみなが歩いていく道をたどるのではなく、勇気をもって右あるいは左へ、生涯の転機をも選ばなければなりません」といふ、それは苦しい選択にもなるわけですが、先生は「勇気を出さなければなりません」といふ言葉を、誠に留めて頂きたいと思ひます。多分、デーケン先生はこの言葉を聖書のヨハネ福音書16章31節、33節にありますが「あなたがたは世で苦難がある。しかし、勇気を出さなさい。私は既に世に勝つています。」から導いたのかも知れません。勇気をもって、右左どちらの方向に進むか、辛い選択を勇気をもってすればどのような苦難をも乗り越えることができる

と言ふことだと思ひます。4年間あるいは2年間、本学での学びや学内・学外で関わらないさまさまな活動から皆さまにはその姿勢、態度、意気込みそして勇気が備わっており、自信を持ち堂々と世に出ていって下さい。 さて、本学卒業生の就職率はほぼ100%でここ数年推移しております。地元へ根付いた大学としてこの地域へ就職する卒業生が少なくありませんし、就職に関して保護者の皆さまも安心のことと拝察しております。高い就職率はご来賓の皆さまのお力添えもあり感謝申し上げます。 皆さまは本学の歴史と伝統のある大学に在学したことに、堂々たる誇りを持って欲しいのです。卒業した多くの先輩たちが社会で活躍しており、皆さまはさまざまな場面において同窓であることの価値観を経験するでしょう。 本学を卒業修了した皆さまは、校友会という同窓会に入会することになります。本学院から中学校、高等学校、大学、大学院を含めこれまでに約3万3千人という多くの先輩が飛び立っております。特に私立の教育機関で先輩後輩との絆はもとより母校に対する心のこもった支援

は同窓会、校友会の最も重要な活動であり、これによって更に弘前学院大学は発展していきます。何卒、よろしくお願ひ申しあげます。 最後になりましたが、将来、皆さまが素晴らしい伴侶を得て、皆さんのお子様たちが弘前学院聖愛中学校、高等学校そして母校となる弘前学院大学を目指していただき、弘前学院の歴史を共に作っていくように私も教職員は素晴らしい教育環境、研究環境、運営環境を形作って行きます。以上、皆さんの前途を祝し、私の式辞といたします。皆さまにそして全ての大学関係者に神の思召しを。 God Bless You

最近のビル建設工事には目を見張るものがある。工事開始前の十分な設備資材や材料の調達、最新の機械や工具の活用、念入りな施工計画、優秀な工事関係者、騒音や周囲の環境への配慮などによって、工事期間の短縮はもとより重厚かつ満遍な4階建て校舎が、12か月少々の工事期間で目の前に完成した。 2019(平成31)年2月28日(木)に新1号館は竣工し弘前学院への引き渡しは完了した。待ちに待ったその時である。首都圏の建設ラッシュで工事に係るスタッフなどの獲得が難しい短い期間で完成に結び付けて頂き工事関係者に深く感謝したい。 旧1号館は耐震診断の結果、改築の判定が下り(弘学時報第72号2018年7月5日発行参照)、学

校法人阿保邦弘理事長・学院長の英断で耐震性に富む新校舎建設に至ったわけである。 以前、正門があった東側道路近くの敷地に建設され、大学の顔となる正門を兼ねるアプローチを取り込み、前面の柱には「弘前学院大学」(「学校法人弘前学院」及び「弘前学院大学大学院」のプレート)が輝く、4つの円形の門は極めて特徴的であり、そのトップにキーストーンとも思われるタイルが施されている。中庭を囲んでロの字型の4階の建物の西側にはやはり円形の二つの門を通してキャンパスに続く。春には満開の桜を正面の4つの門を通して楽しめるであろう。外観は弘前学院本部の建物と同色のタイルを基本とし、それは看護学部棟(6号館)の外観とも調和する。 内部構造としては旧1号館の各部屋を全て配置したこと、ほぼ建築面積は同じである。しかし地下室はない。2、3階は廊下で一周できるし、講義室や各研究室など機能的に行き来できるように、今から楽しみである。もちろんラウンジ・ホールとしても使用でき、空調の完備された空間は学生のみならず教職員にとっても満足がいくものである。現在の3号館にある学生ホールとともに大いに利用して欲しい。 中庭では学祭などさまざまなイベント開催に最適であり、四隅には例えば万国旗を張り巡らせた旗、校旗、垂れ幕などを飾れるよう施してある。4階の学生ラウンジからは秀峰岩木山が眺められ、時の安らぎを得られる。また、旧1号館から全ての机、椅子を移動した4階の階段教室(大講義室)はさらに使いやすくなり、「ヒロガク教養講話」を担当しこの地で活躍する外部講師たちの感想を心待ちにしている。 弘前学院大学は新校舎完成を契機とし、さらに学生への質の高い教育を進め、また教職員においては教育、研究、大学運営に邁進していく所存である。そしてこの「弘学時報」を手にとった方々には是非とも弘前学院大学にお出掛け頂きたい。

り、現代でも多くの人々に感動を与えている。 ことばの力は時代や幾多の変遷を経て衰えることはなかった。現代でも情報という衣をまとって威力を増している。 教育界にも特徴的なことばが数多く誕生した。その中でも社会に大きな影響を与えたのが「偏差値」である。 偏差値は誕生した当初から幅を利かせていた。その存在感は現在まで絶対的の力をもち続けたと言っ

てよい。 高校現場では偏差値を基準に大学を選ぶことが常態化し、それに伴って大学の詳細なランク付けが進んだ。 一方、高校自体も偏差値の高い大学にだけ進学させるか、1点刻みで格付けされるようになった。 社会では進学する高校や大学によって人物の優劣を判断する風潮が強まり、偏差値が人物評価の基準になるという奇妙な現象も起き

た。 ところで、偏差値がこれほど日本の教育に影響を与えるきっかけになったのは、1979年から導入された大学共通第一次学力試験(当初は国立大学対象からだと記憶している。 それまでは国立大学には一二期校があり、受験生には大学を二回受けるチャンスがあった。 各大学の入試問題にはそれぞれ特徴があり、受験生は志望大学の入試に備えて独自の対策を立てるといった構図も生まれた。 ところが、急激な大学進学率の上昇に伴って、特定の大学、学部

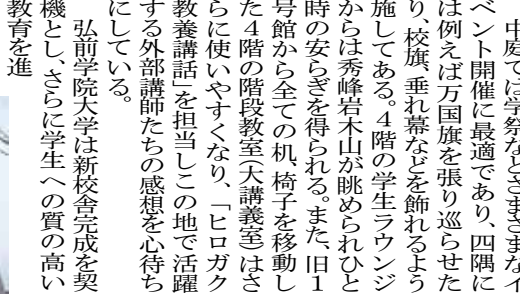
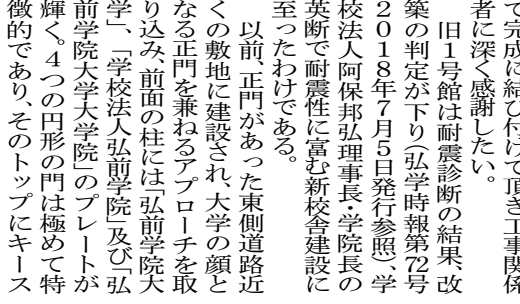
に志願者が集中したことで受験競争の激化が生じてきた。 この時期に入試地獄とか受験戦

争などという言葉が生まれ、大いにマスコミを賑わしたことはまた自分の記憶に新しい。 その弊害の改善を目的に導入されたのが共通一次試験である。 1月には5教科7科目についてマークシート方式で実施、3月には大学ごとの二次試験を行うと決まった。 選択式と記述式の両問題の結果で入学候補者を決定するという方式であり、画期的な入試選抜と喧伝された。 共通一次によって国立大学は1校しか受験できないという制度になった。そしてこの一発勝負は受験地獄緩和の新機軸となるはずだった。(次号に続く)

「弘学時報」を手に取った方々には是非とも弘前学院大学にお出掛け頂きたい。

1号館、竣工さる

学長 吉岡 利忠



研究紹介④

最近の研究について

社会福祉学部長・教授 石田 和男



私は、専攻が哲学で、特にフランス現代哲学を専門に研究してまいりました。私の学部時代を過ごした中央大学哲学科の教師には、特に現象学を専門にする高名な先生が少なからずおりました。メルロ・ポンティやハイデガーの木田元先生、ハイデガーの桑本務先生、キルケゴールの斎藤信治先生です。そういうこともあり私は卒論の題に『モリス・メルロ・ポンティ、その知覚と行動の概念について』を選びました。当時はまだ『知覚の現象学』は日本語訳も完成しておらず、仏和辞典にかじりついて自分で訳してみました。

その後、大学院は法政大学の哲学研究科に移り、梶田啓三郎先生のもとで『キルケゴールの反復について』研究。その後1980年代は法政大学の第一教養部の講師をしながら、ニチエの影響もあって美学に関心をもち『演劇的美意識の発生』(東海大学出版会)『ベーター・クラウゼン・エアーブラシの機銃掃射』(ユリイカ)『不易のモード』(ユリイカ)を発表。1990年代はソ連崩壊、ベルリンの壁消失、日本のバブル崩壊もあって、関心は戦争論、国際政治に移りました。このころは年の三分の一はフランスに滞在、『ピデオ・ポリティックの時代』、『M・ギョームとの対談』(現代思想)『現代戦争論序説』、『ポール・ヴィリヤとの対談』(現代思想)を発表。M・フーコーの『生・政』

身近な地元の誇り

談話室



看護学部 助手 木田 優子

昨年4月より本学で勤務し、1年を迎えます。看護学部の裏にあるサイクリングロードは、学生の頃の通学路でした。そのため、駐車場や、校内の階段を降りている時にサイクリングロードが見えると、看護学生の頃、実習中は寝不足になりながら急ぎ足で自転車をこぎ、桜やりんごの木、岩木山を眺める余裕が少なかったことを思い出します。また、その頃の私は、当たり前にある身近なものの「誇り」に気付くことが出来ませんでした。

卒業後私は、就職のため、弘前

治に関心をもちました。また、J・デリダの「ネルソン・マンデラを救え」に感銘、南アフリカのアパルトヘイトをテーマにした劇作を翻訳、上演しました。主演…いしだ吉成「ボズマンとレナ」(立公会ホール)。このころポンピーセンターの機関誌「トラベルズ」(リプロボート)の日本語版の編集責任もしました。この時、J・ボードリヤールやルイ・マランたちと交流、その結果『世紀末の他者たち』(紀伊国屋書店)の翻訳を手掛けることになりました。

2000年になってからは『動物たちの沈黙』(E・フォントネ)『思考する動物たち』(J・バイ)の翻訳を手掛けたことで、後期フッサールの他者性論の見直しをしました。いわゆる独我論、人間中心主義の克服ですが、ハイデガーもそのテーマを抱えていました。しかし彼は若い時ナチ協力をしたということと批判されました。そのこともあってその後デリダ、ナンシー

高さでも見ることが出来る、ことを知りました。そして、「りんご」です。りんごは、誰かに切ってもらって食べることが当たり前で、むしろ切ってもらわなければ食べない、と青森県外の人に話したら、「もったいない!」と呆れた顔でした。その後、弘前のりんごのおいしさに改めて気付く、自分でも切って食べるようになりました。弘前を離れて知った地元の誇りは、今とても大好きで楽しみにしています。気が付かせてくださった方に感謝をしています。これから地元を離れる方も、また弘前で新生活を迎える方も、今まで身近に、当たり前にあったからこそ気付くことが多かった多くの「誇り」との出会いや気付きを大切にしていただきたいと思えます。そして、時には自分の支えとなることもあるかもしれません。

「地域総合文化研究所」講演会報告

文学研究科 准教授 入江 英弥

本年度三回の講演会を主催した。ここに紹介したい。第一回は、二〇一八年十月二十日(土)に本学礼拝堂を会場にして、看護学部の先生方による講演会を開催した。最初に、本学看護学部准教授川村泰子氏が「健康と地域文化」と題して、「生活習慣の改善」「青森県の健康課題」「健康づくり」の三点について述べられた。「生活習慣の改善」では、青森県南郷村におけるどぶろく造りとアルコール依存症の関係を取り上げられ、改善するには「飲む、飲まない」ではなく、地域文化として考えることが必要であることを説かれた。

二番目に、本学看護学部教授三上聖治氏が「シマと食」多様性と持続性」と題して、ミクロナシア連邦の島々における食事情を調査に基づいて報告された。昆虫食を含めた多様な食生活であることを明らかにされ、一方で、現代における日本の食事情を取り上げられ、いかに偏りがあるかを対比的に述べられた。なお、シマとは「ある程度隔絶された生活圏」を意味するという。第二回目は、十一月二十四日(土)に弘前市文化センター中会議室を会場にして、「ねぶたと地

「文学部・社会福祉学部 合同学内就職セミナー」報告

文学研究科 准教授 入江 英弥

平成三十年度文学部・社会福祉学部合同学内就職セミナーを三月七日(木)に弘前パークホテルにおいて開催した。昨年度は一般企業と福祉施設を招いての学内就職セミナーはそれぞれ別日に開催していたが、今年度は集約し、同日の開催とした。一般企業は三十五の事業所、福祉施設は十九の法人施設、就職支援業者は二社の参加があり、合計五十六のブースを設けた。参加学生は二三年生合わせて八十一名(内看護学部三年生三名)であり、ホテルの二つの会場の各ブースでは採用担当者から

ら脱構築的他者性論が注目されました。そんな中で私は、動物行動論の成果に注目、ユクスキニール、E・モリスらの環世界論の影響のもと『ダニの感覚器と環世界』(本学研究紀要)を書きました。後期メルロ・ポンティの自然概念やドゥルーズのアレンジメントを援用しました。それはエッセイ集『イマージュの箱舟』(彩流社)に収録されています。いまは「粘菌論…動物と植物のはざま」を書いて

ています。まだ何が出てくるかわかりませんがこれから冒険に出かける時のようにドキドキです。また小学校の部活で生物実験室にいた時のことを思い出します。あとは生物にとつての死の位置づけの問題に関心があります。興味あるテーマですので英語か仏語で書こうと思っています。今年の後半にはエッセイ集『北奥のラビリンズ』(彩流社)を出版する予定です。

このポスターセッションは、4年生20名が、各自の卒業論文の内容を、模造紙1枚にまとめ、教室の壁に掲示し、教員及び3年生などに対して、発表し、質疑応答するものです。発表する4年生は、カラフルなイラストや写真などを使いながら、それぞれの卒業論文の要旨を、多少、緊張しながら発表し、他の学生からの質問に答えているようでした。

来年度に卒業論文を書く3年生も何人か参加し、4年生の発表に耳を傾けておりました。うまく参考にしてもらえる事を願っております。

最後に、弘前市長 櫻田宏氏が基調講演を行った。(写真 氏の言葉をお借りすれば、「櫻田宏のねぶたヒストリー」といえる)講演で、豊富な写真を提示しながら実際に制作してきたねぶたを年次別にわかりやすく解説された。その中で、一つの目的に向かって皆が結果することの大切さや、人々の思いが重要であることを説かれた。また、ねぶたを造ることによって一つのコミュニティが生まれ、人材育成の場にもなっていることを指摘された。

パネラーの第一番目に、東地区町会連合会ねぶたの葛西将氏が登場され、地元の小学校に出向いてねぶたの魅力伝えて、ねぶた文化の継承に寄与していることを具体的に述べられた。

第二番目に、西地区ねぶた親交会の白井宏之氏が、時代に応じてねぶたを造ってきた歴史を振り返られ、地域の中で継承していくという点が大切であることを説かれた。

第三番目に、ねぶた絵師で、本学文学部四年生の野村雄大氏が、絵師としての活動を語られた上で、場所の確保や腕を發揮する場があまりないなど絵師ならではの

問題点を述べられた。休憩を挟んで、会場から寄せられた質問や意見に対してパネラーの方々が答え、ねぶたの抱える問題点が明確化された。

第三回目は、二〇一九年一月二十六日(土)に本学一五教室を会場にして、「津軽の獅子踊研究会I 獅子踊の身体性」と題する会を開催した。最初に、本学文学部卒業生の齋藤唯央奈氏が「物語と身体性の融和」新屋獅子踊を通して」と題して、なせ新屋(あらや)獅子踊保存会の人たちが演じる獅子踊が優れた評価を受けてきたかを採訪調査によって明らかにされ



た。当保存会において、基本動作を重視しつつ、演目の筋立てにあわせて獅子の心情をこまやかに表現している点を指摘された。次に、本研究客員研究員・弘前大学非常勤講師の下田雄次氏が、「獅子踊の所作と日常の身体技法」と題して、腰を落とし姿勢や、同じ側の手足や肩、腰などを同じ方向に動かす動きなど獅子踊の身体技法が日本の伝統的な武術や、かつての生活にもみられることから、分野を超えて存在する類型的なものであることを明らかにされた。

ております。終了後、4年生を囲んで、フェアウェル・パーティも開かれました。

### hug work サテライト事業と 弘大特別支援学校カフェエ班とコラボ

社会福祉学部 教授 葛西 久志

1月23日(水)に本学hug work サテライト事業と弘大教育学部特別支援学校の高等部作業学習「カフェエ班」とのコラボを行い、とても有意義なひと時を過ごしました。

本学は、初めての試みでしたが、カフェエ班の生徒の皆さんはじめ引率指導の先生方の対応に学生や、教職員も温かな気持ちでいっぱいになりました。また、偶発的出来事としては、文部部の今村ゼミにカフェエ班の生徒



「ハグワークサテライトでのコーヒーマスターはお世話になりました。僕が声をかけたとき学院大学の学生さんたちが笑顔で応えてくれたので、さらにやる

気と笑顔がどんどん出て、最後まで、大きな声で接客できました。」コーヒーマスターの途中で、バランスをくずして、コーヒースポットをこぼしてしまいました。急いで床をふいている時に学生さんたちが突然手伝ってくれて驚きました。少し慌てて、ドキドキしていたので手伝ってくれてとても嬉しい気持ちになりました。今回の経験を生かして、コーヒーマスターだけでなく、どんな時にも困っている人たちがいたら手助けできる社会人になりたいと思います。」また「学院大学の先生たちに『コーヒーマスターですか?』と笑顔で渡すことができました。先生たちが『ありがとうございます。』と受け取ってくれて、私は嬉しい気持ちになりました。等々

### 「平成30年度 学生と市長の放課後ミーティング」に参加して

社会福祉学部 社会福祉学科3年 工藤 桜佳

「大学コンソーシアム学都ひろさき」において平成30年12月2日(日)に土手町コミュニティパーク(青森県弘前市土手町)で開催された「学生と市長の放課後ミーティング」(以下、市長ミーティング)に参加しました。市長ミーティングとは、弘前市長と市民が市政に関して直接意見交換を行い、市民が市政に関する理解を深め市民参画・市民との協働のために土台づくり及び市民の声を伝える開かれた市役所づくりを推進する弘前市の事業です。弘前市の地域課題や大学生が考える地域を盛り上げる仕組みなどについて意見交換をし、「学生力」による魅力あふれるまちづくりの

推進と「学園都市ひろさき」について考える契機とするために開催されました。今回は、本学をはじめ、弘前大学及び弘前医療福祉大学から、地域で活動する団体に所属している11名が参加しました。

困窮、多重債務の問題等、地域の課題が多様化・複雑化してきているのではないかとこのことを伝える人に対し包括的に生活のアセスメントを行い、適切な部門やサービスへつなげるワンストップサービス等の提供が必要であること、そしてこの役割は社会福祉専門職の国家資格である社会福祉士や精神保健福祉士が適任であり、市の行政機関にそれらの専門職を増やすことを提案しました。櫻田市長からは、ひろさきの市民生活センターで広域市町村の消費生活相談を受け付けていることや、成年後見制度関係の専門職を配置した総合的な相談ができる窓口が必要であること等、これからの弘前市における社会福祉の展望についてお聞きすることができ、私自身さ

### 弘前から得た思い出

朴 観俊(バク エジュン)

三月が終わる頃、二回目の日本訪問ができました。島根県に行ったときも勉強のためでしたが、今回は実際に暮らすと考えるだけで胸がいっぱいでした。でも日本生活はそんなに簡単なことではなかった。日本語がでけると理解するのは全然違いました。今回の経験を生かして、コーヒーマスターだけでなく、どんな時にも困っている人たちがいたら手助けできる社会人になりたいと思います。」また「学院大学の先生たちに『コーヒーマスターですか?』と笑顔で渡すことができました。先生たちが『ありがとうございます。』と受け取ってくれて、私は嬉しい気持ちになりました。等々

うからです。それで最初はゴミの問題とかいろいろと苦労したけど、夏まで暮らしたらもう慣れてきてよかったです。中学の時からアニメの世界を通して日本に接したので、部活とか教室ではどういう風に学ぶか興味がありました。憧れとも言えるでしょう。そして、昨年からは今年まで実際に受けてみると、やっぱり韓国とは違うんだな、と感じました。

### 第五回国語国文学会冬季大会 および卒業論文発表会

文学部 教授 鎌田 学

2019年1月19日(土)、1号館414教室にて第五回国語国文学会冬季大会が英語英米文学会と共同で開催された。当日厳しい寒さにもかかわらず、入場者数は学内外から120名と盛会であった。

見学し、歴史に残る数々の画業を振り返った。また、石巻市を一望できる日和山公園では東日本震災で亡くなられた多くの方々に黙祷を捧げた。そして翌日、避難所として地域住民を守った日蓮宗神明山法音寺を訪問し、被災者の方々からお話を直接伺うことができた。

この度、二〇一八(平成三十一年)年度の成績優秀者が決まり、三月十六日に表彰状の授与が学位記授与式後に行われた。

次に、松岡洋子氏(岩手大学グローバル教育センター教授、本学非常勤講師)が「日本語を共通語にできるか」外国人材を受け入れる社会における日本語教育」と題して講演を行った。

### 日本ソーシヤルワーク教育学校連盟の成績優秀者表彰される

この賞は、社会福祉士・精神保健福祉士養成課程修了者で、学業成績・人物ともに優秀である学生に対し贈られるものです。日本ソーシヤルワーク教育学校連盟成績優秀表彰者は、安達正太さん(社

会福祉士養成課程、田中菜穂さん(精神保健福祉士養成課程)です。



はなく、なんか他の活動もやるべきだと考えました。もうすぐ帰りますけど、この思い出は4年生が終わって社会人になるとしても心のなかに大切に持って生きたいと思います。



弘前学院校友会より  
母校援助金寄贈される  
去る、2月27日(水)に、弘前学院校友会中田悦子会長より2018年度の母校援助金30万円が寄贈されました。この援助金は毎年寄贈され、今年は、新1号館完成に伴う環境整備の資金として使用されます。校友会の皆様方の熱い援助に心から感謝申し上げます。

外国人労働者の受け入れを拡大するために出入国管理法が改正された現在、日本社会にどのような変化が生じるのか、課題は何なのか、そして日本語が共通語になりうるかについて、ドイツや韓国での言語政策や最新の各種データを紹介しつつ話された。現状、外国人に「生活者としての日本語」を教えているのは多くボランティアであり、全体の58%を占めているという指摘もされた。日本語教師を目指す学生にとっては、厳しい現実を垣間見た講演であったかもしれない。なお、講演後、会場から複数の興味ある質問が投げかけられた。これは今回のテーマについての関心の高さを示すものと言えるだろう。



-2019-  
看護学部  
学内就職セミナー  
2019年  
5月11日(土)  
午後1時~4時まで  
場所  
弘前学院大学 体育館

いながらにして  
病院を知る  
チャンス!!

二〇一八年度 理事長賞授与者

- 文学部 英語・英米文学科 秋田 望
- 日本語・日本文学科 工藤 早紀
- 社会福祉学部・社会福祉学科 赤平 奈南
- 看護学部・看護学科 大森 未来

四年間を振り返って

文学部 英語・英米文学科卒 秋田 望



卒業のときを迎えて、弘前学院大学で過ごした日々は、充実した四年間であり、本当にあつという間だったと思います。こうして無事に卒業できたのは、家族や友人、先生方の支えがあったからだと思います。入学当初は新たな環境への不安や緊張感を抱いていましたが、優しい友人たちや先生方のおかげですぐに慣れることができました。入学した当初こそ、長い学生生活になると予想していましたが、

今となってはあつという間に過ぎてしまったと感じています。四年間を振り返ると、本当に様々な経験をする機会がありました。最初にリトリートで英文科の人たちと話した日も、限られた授業で始発の電車に乗るために五時半に起きた日も、卒業論文を無事に提出できた日も、すべてが鮮明に覚えています。すべてがかけがえのない思い出です。英文科の人たちは皆本当に優しく、いい人たちばかりで、そのおかげで楽しい学校生活を送ることができました。この学校に入っていないければ、出会っていな

かかったと思います。私はこの出会いを大切にしたいです。一年や二年のころは、主に基礎となる部分の授業から始まりましたが、三年や四年ではパワーポイントを使ったプレゼンテーションやディスカッション、ポスターセッションなど実践的な授業が増え、そこで学んだことはその後の就職活動等で活かすことができました。

弘前学院大学に入学し、多くの人と出会ったようにこれから多きつと多くの方と出会うと思います。一つ一つの出会いを大切に、仲間や家族の支えがあることを忘れず、これからも頑張っていきたいと思います。今までお世話になった先生方とともに楽しい時間を過ごした友人たち、そして一番近くで私を支え見守ってくれた家族には本当に感謝しています。常に多くの支えがあったからこそ、無事に卒業の日を迎えることができました。四年間ありがとうございました。

「大学生生活を振り返って」

文学部 日本語・日本文学科卒 工藤 早紀



大学での4年間を振り返ると、楽しかった出来事の数々が思い出されるが、同時に辛い出来事もたくさんあったなあとと思う。正直に言うとうまくいかなくて辛いことが多かった。まず、1年生の頃は履修科目が多く、講義につ

いて行くのに必死になっていました。毎日の講義に加え、発表準備やレポート作成をするのもあり、とにかく忙しかったです。3年生になると履修科目も少なくなってきたが、私は国語国文学会の委員長に就任したため、科目は減ってもやるべき仕事が増えた。このように忙しい日々の中、失敗や上手くいかないことが多く、たくさんの壁にぶつかった。しかし、私はそれらをなんと

か乗り越えることができたように思う。このように書くにあたり、私一人だけの力で乗り越えられたかのようにだが、決してそうではなく、周囲の人々の支えがあったからこそである。共に勉学に励む仲間や、国文学会で一緒に活動してきた先輩・後輩を含めた多くの仲間たち。そして、様々な学びを与えてくださった先生方や、いつでも見守ってくれた家族。数多くの人たちの支えがなくては、なしえなかった。皆様には感謝の気持ちでいっぱいである。この感謝の

大学四年間を振り返って

社会福祉学部 社会福祉学科卒 赤平 奈南



私の大学四年間は、多くのことに挑戦し、多くのことを経験できた大学生活だったと思います。アルバイトや海外旅行、ボランティアなどで様々な経験をし、様々な人と関

わっていったことで、自分の視野を広げることが出来たと思います。私は、社会に出る前に多くの経験を積みかけたので、自分から進んで、自分がやったことがないことに積極的に挑戦するように心がけていました。特に、四年間、ボランティアに参加させていただく機会がとて多かったのです。最初は人が足りないか

らと頼まれて参加することが多かったですが、何度も参加していくうちに顔を覚えてもらったり、「ありがとう」と笑ってもらえることが本当に嬉しくて、自分からまた参加したいと思うようになりました。ボランティアを通じて多くの方と関わったことで、自分も成長できたと思っています。また、私を支えてくれた友人やサークルの仲間、先生方にはとても感謝しています。友人と一緒にご飯を食べたり、

お喋りしながら一緒に帰ったり、遊びに行ったことは、今では全てが良い思い出です。相談のつてくださった先生や気さくに話しかけてくださった先生方にも感謝しています。いつも優しく温かい言葉でくださる先生を見て、私もそのような人になりたいと、心から尊敬していました。福祉の仕事は、他人の人生に関わることで、私自身その方のことで悩んだり、苦労することも多いと思います。

が、その分やりがいもあると思っています。福祉の仕事をする中で、支援を受ける方の人生がより良いものになり、その方を笑顔にできるような存在になれたらと思います。今の私がいるのは、ここまで支えてくれた親や友人、先輩方や先生方、後輩などの協力があったからこそだと思います。四年間、私に関わってくれた全ての方に感謝の気持ちを伝えたいです。四年間本当にありがとうございました。

祝卒業

大学生生活を振り返って

看護学部 看護学科卒 大森 未来



私は、この四年間で多くのことを学ぶことができました。今までの学校生活の中で、一番充実していたといつても過言ではないと思います。そして大学で学べたことにとっても感謝しています。この四年間を振り返って、なぜこんなに充実していたのか考えてみました。それは、学びに対する姿勢や考え方の変化であったと思います。高校までは先生の授業を受け、黒板に書かれた文字をそのままノートに写したり、参考書で問題を解いたり受け身の姿勢でした。

ただ、思い返してみると嬉しかったことばかりではありませんでした。三年生の後期から本格的に始まった実習では、疾患が同じであっても患者さんの症状や状態が全く同じという事はなく、看護の難しさを感じました。悩んだ時、先生方や実習先の看護師さんからの助言や丁寧な指導があり、患者さんの状態、生活習慣、好みなどの個性に応じた最善の看護を見つけることができました。患者さんやご家族のご協力があり、実りのある実習をさせて頂きました。得られた学びを今後、看護師として臨床の場で活かせるように精進していきたいと思

ます。四月からは新しい環境での生活が始まりますが、大学の経験や出会いがこれからは私を支えてくれると思います。本当に貴重な時間を過ごすことができました。最後になりましたが、大学生活を支えて下さった家族、先生方、友人、関わってくれた皆様に心より感謝申し上げます。

とができました。最後になりましたが、大学生活を支えて下さった家族、先生方、友人、関わってくれた皆様に心より感謝申し上げます。

弘前学院外人宣教師館・礼拝堂 春の特別公開 2019年4月27日(土)~29日(月・祝) 9:30~16:00 見学無料

「アメリカから来た『青い目の人形』と青森」  
宣教師が暮らしたこの宣教師館に飾られている「青い目の人形」。1927年にアメリカから弘前女学校附属の幼稚園に贈られたこの人形が持つ歴史とは... 期間中は本学学生がご案内します。

- ◆新校舎をバックに桜咲くキャンパスでのお楽しみ企画
  - ・27、28日 11:00~ 軽食・雑貨コーナー(売り切れ次第終了)、聖愛中学・高校紹介コーナー
  - ・29日 11:00~、14:00~ 弘前学院大学ハンドベルクワイア ミニコンサート
- ◆駐車場を無料開放
  - ・4月27日~5月6日は、大学構内駐車場を無料開放(8:30~21:00、夜間施設。盗難・事故の責任は負いません。)
  - ・見学ののち、大鰐線に乗って弘前公園へ。中央弘前駅で降車時にもらえる乗車証明書で弘前城の有料区域に無料で入れます。

詳細は、大学HPおよびfacebookページ「弘前学院外人宣教師館」で。随時更新します!